

現像法としての表現技術

大阪芸術大学 美術学科 教授 日下部 一司

[概要]

「現像」あるいは「印画」という言葉は、撮影したものを眼に見えるようにするための細工のことである。写真はなんらかの支持体の上に画像を定着（あるいは投影）することではじめて見ることができるわけで、ダゲレオタイプは銅板の上に、ゼラチンシルバークリフトは紙の上に、スライド写真はプロジェクターで壁面に、というように必ず支持体を必要とする。そしてパソコンやスマホの液晶は、支持体でありながら同時に写真の「現像装置」の役割も果たしているのである。このように写真の現像を広義に解釈し、従来の写真現像（古典印画法を含む）だけではなく版表現とも結びつけ、その技術と方法を研究するものである。

今日ではパソコンやプリンター、インターネットの普及によって「複数性」の概念が変わってきた。Webサイトで発信することで一瞬にして不特定多数の他者に情報を提供することができる今日では、印刷術としての「複数性」の意味も変貌したと言わざるを得ない。

版画は浮世絵に見られるように、オリジナルを複製し多くの人に流布するための印刷物であった。しかし1950年代のポップアートの出現と時を同じくしてエディションというルールが生まれ、版画のオリジナル性が問われるようになる。それは商品としての版画の誕生であったわけでもあるが、版による絵画表現（表現技術としての版画）という概念の確立であったともいえよう。

写真に關しても同様な変化があった。ダゲレオタイプのような唯一無二の写真から、ネガの発明による複数枚数の印画が可能となり、現在ではスマホやパソコン上で確認できるデジタル画像の時代へと変化してきた。

私の関心は手仕事の写真現像である。それは情報優位の写真ではなく「質感を持った映像」というべきもので、これまで追求してきたテーマ「支持体と物質感」の延長として、次の3つの項目について研究を行った。

[現像法としての版画]

写真を印刷しようとする多くの場合「網分解」と呼ばれる工程が必要である。製版作業によって分解された「点」が白い紙の上に刷られると、そこに画像イメージが浮かび上がるのである。

逆に点を用いない印刷方法として思い浮かぶのはコロタイプ印刷である。ブROMオイルという古典印画法も同じような原理である。ゼラチン質の水分含有量を利用したこれらの印刷技法では規則正しい点の集合で画像が形成されていない。

この度の研究では、敢えてシルクスクリーン印刷技法で点の規則性を無くし、エッジを不明瞭な形で印刷することにより写真表現としての可能性を探った。具体的には誤差拡散法（ディザ）による画像分解や、インクの滲みを応用する印刷法の工夫などである。

誤差拡散法ではざらざらした不規則な点が画像再現をするのだが、高解像度の写真をそのまま使うと点自体が小さすぎてスクリーン印刷できないこともあり、

解像度を下げ印刷可能なギリギリの大きさと扱うことを試みた。

また、不明瞭な点の印刷という観点から版の上から溶剤で拭くことによりエッジを滲ます方法、あるいは2階調のコピー画像を刷り重ねる方法などの実験を行った。これは従来からの研究テーマである「支持体と画像の物質感について」の延長としての試みであるが、絵画的な効果は得られたが写真イメージの再現性という点で問題を残している。

[写真と絵の具（顔料）]

写真に彩色する方法としてまず思い浮かぶのは「横浜写真」である。幕末から明治にかけて横浜を中心に発達した商業写真で、日本の風景や風俗の様子が写されている。それらの写真（鶏卵紙）は日本画顔料で彩色され、蒔絵のアルバムに収められた。

当時、油絵の具を使って着彩する技法もあった。横山松三郎（1838-1884）は「写真油絵」と称し、印画紙の表面の被膜を剥がし、その裏から油絵の具を用いて彩色した。紙の裏から色彩を滲み出させるというこの技法は、東洋人らしい素材への関わり方を感じさせる。

このように明治・大正時代にはピクトリアリズムの台頭により、多くのピグメント法が試みられた。

「雑巾掛け」と呼ばれる技法も、顔料を使うという点でピクトリアルな写真印画の方法かもしれない。雑巾がけとは、プリントした印画紙に油絵の具を塗りつけ、布で拭き取るなどして手を加えた手彩色の一種である。その様子が雑巾をかけるようなので「雑巾がけ」という名称と呼ばれ1920-30年頃、主に日本で流行した。

一昨年度からこの技法の研究を継続している。当初、先述したブROMオイル法の経験からイメージし、印画紙を水で濡らす方法を探っていた。それはゼラチン質の硬化具合により水分の含有量が異なることに着目し、水と油の反発を応用したものだった。しかし、期待通りの効果が得られず、今年度は水分を与えない方法を情報収集しその方法で制作を行うことにした。印画紙についてもいろいろ試したが、バライタ印画紙「Ilford Multigrade Art 300」を用いることで、良好な結果を得られつつある。

[写真鑑賞における触覚]

前述したように写真画像は支持体の存在から無縁ではあり得ない。いつも触覚性を持って現実空間と関わるのである。制作した作品を中心に、手に取って眺められる印刷物を作ったのもその理由による。紙に刷られた印刷物（本・折り畳むなどの形式）はまさに触覚と空間を感じさせる媒体でもある。

また、昨年9月のGallery Yamaguchi kunst-bau（大阪市）、今年2月の0ギャラリーeyes（大阪市）での個展で、そうした観点からの展示ができたのは収穫であった。